

**実親と交流のある里子を養育する里親の体験プロセス**

**—里親インタビューの分析からの考察—**

○ 大阪府立大学 伊藤嘉余子 (03930)

千賀 則史 (名古屋大学・09143)、小池 由佳 (新潟県立大学・02735)、

福田 公教 (関西大学・04184)、安藤 藍 (首都大学東京・08900)、石田 慎二 (帝塚山大学・04185)

[キーワード] : 里親・家族再統合・里親子支援

**1. 研究目的**

2017年度から施行された改正児童福祉法において、家庭における養育が困難または不適切と判断される子どもについては、まず里親委託を優先的に検討するべきとの方向性が示された。さらに、2017年8月には「新しい社会的養育ビジョン」が発表され、里親委託率の高い数値目標が示された。

里親委託を推進することによって、これまでよりも、より多様な子どもが里親家庭に委託されるケースが増えることが予想される。また、現在、社会的養護を必要とする子どもの大半が、実親と連絡を取ることができる状況にあり、里親のもとに、実親との交流を継続する子どもが委託されることも増えるのではないだろうか。

こうした背景や問題意識を踏まえ、本研究では、実親と交流のある里子を現在養育している里親の語りを通して、実親と交流のある里子を養育する里親の体験プロセスについて明らかにするとともに、そのプロセスを支える里親支援のあり方について考察することを目的とした。

**2. 研究の視点および方法**

1) **データの収集** : 実親と交流のある里子を養育する里親を対象に、半構造化面接によるインタビュー調査を実施した。調査時期は2017年11月～2018年1月である。

2) **研究方法の選択** : SCQRM (構造構成主義的質的研究法) をメタ研究法とした M-GTA (修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ) によって分析を行った。

3) **分析対象** : 実親と交流のある里子を養育する里親が語った4事例を対象とした (表1)。

4) **分析手続き** : M-GTA の方法に従い、分析テーマを「里親は実親との交流のある子どもの養育をいかに体験しているか」に設定し、分析焦点者を「実親と交流のある里子を養育する里親」に設定した。分析は以下の手順で行った。①録音データの文字起こしをしたテキストを作成、②分析テーマと分析焦点者に照らして、データの関連する箇所に着目し、類似した部分をヴァリエーションとして収集し、概念を生成、③関連する複数の概念を包括するカテゴリーを生成した上で、それぞれの関係を示したモデルを作成。

**3. 倫理的配慮**

調査依頼時に、インタビューの録音および結果の公表に際しての配慮事項等について説明し、調査当日に同意書を得てから調査を実施した。また、調査はいつでも中断できること、話したくない内容は話さなくてもいいこと等を文書と口頭で説明した。なお、本研究は、大阪府立大学大学院人間社会システム科学研究科の倫理審査委員会の承認を得て実施した。

表1) インタビュー調査で得られた事例の概要

事例1	委託後に実親との交流が始まった里子の養育
事例2	実親との信頼関係構築と里親による実親支援
事例3	長期養育前提で受託した子どもへの真実告知と実親子関係構築支援
事例4	委託中の実親との交流および委託解除後の実親子関係支援

**4. 研究結果**

分析の結果、5つのカテゴリーと12の概念が生成された (詳細は当日配付)。

## 5. 考 察

ストーリーラインによって結果と考察の説明を行う。なお、カテゴリーは【 】、概念は《 》を用いて表す。

### 〔ストーリーライン〕

里親は、実親と交流のある里子を養育するプロセスにおいて【実親との交流にかかる里親の負担や不満】を感じながらも【里子の葛藤への関わりの工夫】と、【実親・里子の関係調整の支援】を行きつ戻りつ行う循環的なプロセスを体験していることがわかった。

実親との交流が始まると、情緒不安定になる里子もいる。そのため《実親との交流による里子の揺れへの寄り添い》を行いつつ、里子の気持ちを受けとめながら、《里子の気持ちと生い立ちの整理》を行う等の【里子の葛藤への関わりの工夫】がなされていることがわかった。また、【実親・里子の関係調整の支援】の際には、親子が一緒に過ごす時間が子どもにとって心地よく有意義な時間になるようにとの里子への愛情から、食料や生活に必要なものを子どもに持たせる等の《実親・里子の交流時の配慮》が行われていた。このプロセスの中で、《里親の中での実親に対する認識の変容》が生まれ、実親への肯定的なまなざしが生まれるとともに「子どものため」という共通目標に向けた《里親と実親のパートナーシップ》が形成されていることが明らかになった。

こうした【里子と実親の交流を支える基盤】として《児童相談所による里子・実親・里親への支援》や《里親仲間による情緒的なサポート》があることがわかった。こうしたさまざまなサポートに支えられながら、里親なりの工夫や支援を展開していく中で、《里子の「自分を語ることば」の獲得》や《里親子関係の安定》を里親自身が実感することによって、【里親子関係の成熟】の手応えが生まれ、自信をもって里子の養育や実親との交流を積み重ねていくことができるようになることが示唆された。

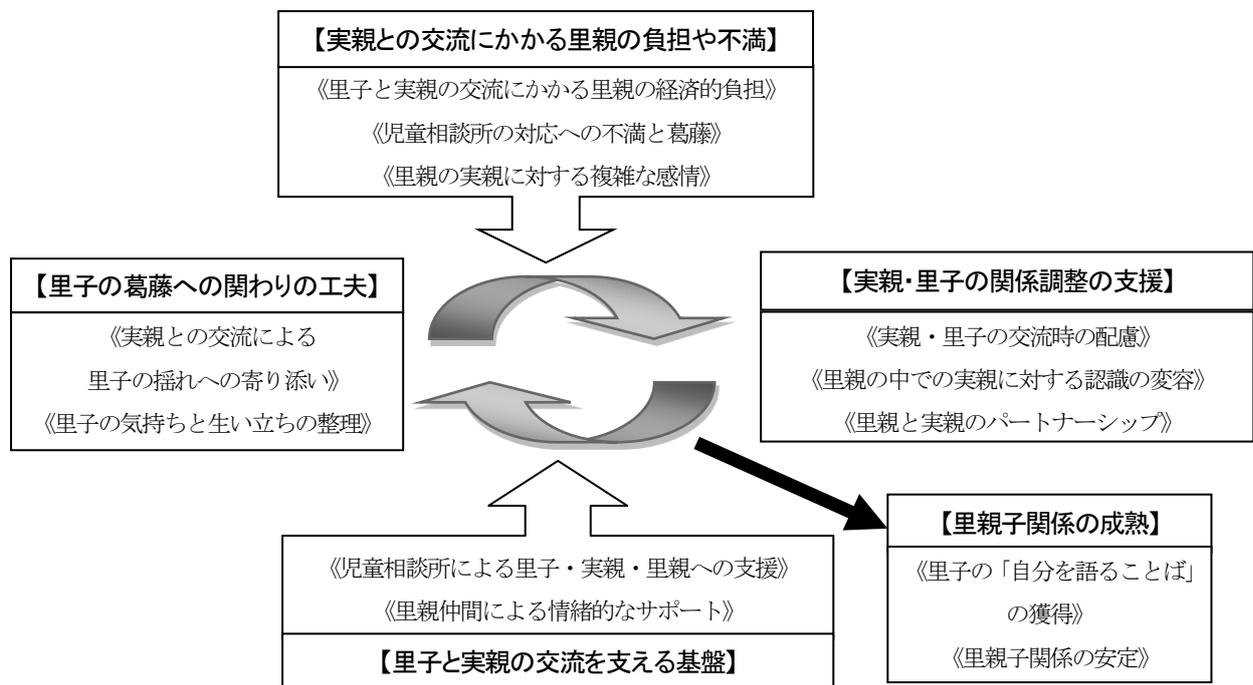


図1：実親と交流のある里子を養育する里親の体験プロセス

## 謝 辞

本研究は、平成29年度「厚生労働省子ども・子育て支援推進調査研究事業」課題番号14「里親家庭における養育実態と支援ニーズに関する調査研究事業」（事業代表者：伊藤嘉余子）の成果の一部をまとめたものである。調査研究にご協力賜りました関係諸氏ならびに里親の皆様に深謝いたします。